

さ中に生活していつまでの生命かと思う日々の連続である。

しかし、この難局のさ中に、かつて機務段に勤務していた中国人から、「中村さん、あの時はお世話になりましたが、何か問題があったら、私にお手伝いさせて下さい」また、「中村さん、あなたは私を知らないだろうが、私は覚えています。住宅移動の際は、私の荷馬車で運ばせて下さい」また、「敗けた日本は大変でしょうから、中国に残って私と一緒に働きましょう」等々と言ってくれたのである。

中村氏は、中国で華北交通の機務段勤務中いかに中国人を理解して協力しあったか、当時から日中友好運動を实践していた人間である。

故郷、盛岡市に引き揚げるや、彼が渡満前勤務していた木津屋食品工業の池野社長から復職を懇望されて就職できた。五十余人の従業員を擁する会社の工場長として、社長並びに社員の皆さんに謝恩の気持で精勵した、引揚者の範を垂れた中村祐太郎氏である

会社を定年退職後は、岩手県庁から望まれて中日帰

国者通訳を委嘱され自立指導に奉仕会員として約十余人の方の更生に尽力し、慈父のごとく親われている。

中村氏は、この事業に生甲斐をもって精勵している。

(社)引揚者団体全国連合会

副理事長 結城 吉之助)

引揚者労苦記

南洋、台湾、蒙疆、残照

石川県 中山 隆

前編

南洋群島パラオ島より内蒙古へ

開教使となって南洋群島パラオ島へ

木工徒弟養成所教官を委嘱される

私は篤信な父母のもとに育ち、在俗の出身ながら大谷大学に入学し、卒業の前年には出家得度して、浄土真宗の僧籍にはいり、法名を釈静照と称し、昭和十三年三月文学部哲学科―西洋哲学・西洋倫理学専攻―を

学師・僧都の称号を得て卒業した。併せて文部省より無試験検定によって修身、教育、ドイツ語の中等科ならびに高等科高等教員の免許状をも授与された。

同年四月東本願寺より開教使に任せられ、大正八年ベルサイユ条約によってグアム島を除き他の島嶼はことごとくわが国の委任統治領となった南洋群島パラオ島コロール町にあった東本願寺パラオ布教所に派遣され開教に従事することになった。

当時南洋群島は昭和四年に創設され、同十七年には大東亜省に吸収編入された拓務省の管轄下であり、コロール町には南洋群島を統轄する南洋庁、その他政治、軍事、経済、文化、社会などの中枢機関が沢山存在した。

同年五月南洋庁より南洋庁立木工従弟養成所の教官を委嘱され、全島より選りすぐられた十七・八歳より二十二、三歳くらいの優秀な学生達を相手に日本の歴史概説と日本語の教育をした。

特に私の静かに語りかけた日本の歴史概説には眼を輝かせ、じつと耳を澄ませて謹聴してくれた。その真剣な真面目な態度に私はいたく感動を覚え、思わず時

間のたつのを忘れて熱心に講義をした。

学校は本来簡単な建築技術の習得者を養成することが主眼ではあったが、私の毎週一〜二回の日本歴史の教養講座は特別に楽しそうでもいつも私を待っていてくれた。間もなく学生達の中に幾人もの親しい青年ができてつらい開教や布教のかたわらではあったが、私にとつてはこれらの学生達との友好な交流はまたとない得がたい人間と人間との貴重な体験であった。

これらの俊秀達はいま頃はどこにどうしているであろうか。想像が許されるならばおそらく各島々の枢要な地位にあつて活動されているであろうことは想像にかたくない。七十歳前後の人達である。

当時マリアナ諸島を原住地とするミクロネシア原住民のチャモロ族にまじつてコロール町には日系の官吏や家族、商社の社員達も多かった。

酋長の娘さんと結婚され、可愛い女の子達にもめぐまれた杉山町長がおられ、ハト時計やグランドピアノもある大きな住居に時々お邪魔して親しくしていただいたことが想起される。

まちなかの街路樹はことごとく十数メートルもある椰子の並木道であった。布教所と学校を往復しながら、時には町の中央にあった平屋建の大きな百貨店から流れる内地より到着したばかりの西洋音楽のレコードを学生達と静かに聞きながら夢のような楽しいひとときを過したこともあった。開教の労苦の中の一服の清涼劑であり、天与の慰安でもあった。

月夜の晩には清く澄みきった星空のもと、椰子の葉の一枚一枚がまるで影絵か押絵のように地上の芝生にくっきりと影をおとす様は、さすが南洋かなという感懐とともに、しばし望郷の念にかられるのであった。

さらにバケツをあげるように降る猛烈なスコールの去った後のすがすがしさはたとえようもなく、四季も乾季雨季もさだかではない南洋であつても、時節時節には美味しい果物が実つて私達を楽しませてくれるのは、天地自然の賜物なのであろうか。小船に乗って、マングロープをかきわけて開教に汗した労苦も、椰子の実に溜まった液体で喉をうるおす快感は、労苦を忘れさせる瞬間でもあった。このような時いつも思

いだすのは、内地にいます母上様であった。私はこの珍しい土地で珍しい果物を食べさせてあげたいという思いでいっぱいであった。さいわいに私は母上様を内地から呼んで二週間余り滞在してもらつた。このことを知つた学生達や島民の方々が、珍しい果物を母上様にといつて贈つてくれて、ほんとうにその優しい心根に母、子ともに深く感謝した。

サイパン島の思い出

内地からコロール島のコロール町には当時船に乗つてサイパン島↓テニヤン島↓ヤップ島↓ロタ島と各島々に寄港しておよそ一週間に要したように思う。各島々には南洋庁の支庁があり、周辺の島嶼が管轄されていた。私はこの間サイパン島に滞在したことがあつたが忘れられないのは、広大な砂糖黍のはたけの中に軽便鉄道が敷かれていて、砂糖黍の収穫時に、錫広すなはちの大きな麦藁帽子をかぶつた男、女の農民達が無蓋の貨車に砂糖黍を満載し、その上にまたがって製糖所の構内に次々と運び込んでいく風景は、丁度西洋映画を見ているようであつた。反面内地から渡り住んで不自由な

なか、炎熱酷暑の中で汗を流す邦人の労苦に思いをはせる時、おのずから心の痛んだことも忘れられない。そして昭和十七年後半の太平洋戦争の激戦の最中に起きたあの悲惨な出来事を誰が想像しえたであろうか。ただ寂として声なく、書くに筆なく、無念の涙にくれつつ、貴い犠牲となった幾万の邦人の老若男女の魂魄こんぱくにたいし、深く厚く心から冥福を祈るのみである。嗚呼、悲しい哉・合掌、念仏。

南洋群島パラオ島より台湾花蓮港へ

大谷派本願寺布教所開設認可さる

時局下、永年台湾開教の緊急性が叫ばれていた矢先、昭和十四年五月になって東本願寺より「台湾花蓮港布教所開設係を命ず」という辞令に接し僅か一か年有余で、親しんだ友人、知人、学生達と涙の別れをせねばならなかった。殊に養成所の学生達はマンゴローブ（紅樹）の板に美事に彫刻をした扁額、アラフラ海でとれた直径二十センチもある真珠貝、それにカヌーやアバイの模型などを手に手に持参して記念に贈ってくれて別れを惜しんだ。愛別離苦、愛し合った人達との涙の

別離はいつの世でも、国境を越え、人種を超えて苦しいものである。これらの品々は、今も私の書齋に大切に保存されていて、当時を追憶しつつ私の無聊を慰めてくれている。学生達より難う。

私は内地へ帰るとまもなく基隆キリン↓台北タイペイ↓宜蘭イラン↓蘇澳スオウ↓花蓮港ホウレンカンに到着した夕闇の中に花蓮港街の黒金通りで大きな陶器の卸商店を経営しておられる御門徒の代表大獄様の出迎えをうけホッと安堵、ここに旅装を解かせていただいた。私の着任は花蓮港在任の御門徒達の強い要望がやっと実現、私の任命がそれであったことなどを知り、必ずや御門徒様達の期待にそわねばならぬと心に堅く誓って遅い寝に就いた。

翌日は晴天であった。私は持参した僧衣に着換えて、単身花蓮港庁に出頭し、大胆にも一面識もない花蓮港庁の庁長さんにお目にかかりたいと申し入れた。暫く待っているとお会い下さるとのこと、庁長執務室に通され、庁長さんにお会いした。名刺をいただいて見ると高原逸人と書いてあった。私は門徒衆に代って、縷々るゝ強く布教所の必要性をのべ開設許可を懇請した。

その後数回懇請に訪序した。そのためか二か月後の七月になって、待望の次の認可証が届いた。

認可証

花蓮港庁花蓮港街

千石通り二二三番戸

中山 隆

昭和十四年六月十五日付願出ノ大谷派本

願寺花蓮港布教所設立の件認可ス

昭和十四年七月二十八日

花蓮港庁長 高原逸人印

私は嬉しさの余り何度もおしただいて、直ちに京都のご本山（東本願寺）に報告すると共に、早速「大谷派本願寺花蓮港布教所」の看板を前記の寓居に揚げた。間もなくご本山から六尺の大きな金欄の阿弥陀如来の御影像が届いたので、床の間に掲げてお守りすることにし、花蓮港在住のご門徒衆にもご披露申し上げるために質素ではあったが、誠意をこめて法要を厳修した。阿弥陀様のお顔を拝みながら、失礼にも「よくぞおいで下さいました。ありがとうございます。」と

心の中で語りかけると、何事か私に語りかけて下さっているようで、嬉しさありがたさがこみあげてきて、思わず涙がはらはらとこぼれたことが忘れられない。私にとってあわただしい転勤と、布教所開設という使命の重さに比較して、意外とすらすらと運んだ布教所開設の実現であったが、これは私の力ではなく、み仏のお力のお蔭と思ひ報恩感謝の念仏を忘れてはならないと思っている。

宜蘭刑務所教誨師として泣く

布教所開設の願望と、その実現の重大な任務が終わると私は台湾総督府の囑託となり、宜蘭刑務所の教誨師を兼務した。そして要請に応じて、不幸な人達の教誨にあたっていたが、どうした訳か知らないが、いつの場合も教誨中私自ら先に涙が流れてきて、涙ながらに心からなる悔悛を訴えた。私の講話に感動したのか、深く顔を垂れて、中には声をあげて泣く人達をあちこちに散見することがしばしばであった。所長は「有り難いことです。かつて見たこともない光景です。」といたく感謝のお言葉をいただいた。私は悪事を犯した

人達であつても心の奥底には眞実、眞正なものに感応し、悔い改めんとする善心の眠っていないことを実際に観て、教誨師という仕事がいかに重要な仕事であるかというところをつくづく実感した次第であつた。私は許されるものならば、これ等の人達と起居を共にして語り明したらどんなにか有意義なことかと思つたが、私にはまだ一つ他に重要な仕事があつた。

生蕃の生活実態調査に挑む

日本の統治時代に高砂族と呼ばれていた原住民（生蕃）が、蕃地で未開の生活を続けている実態を調査することであつた。この仕事は誰からも要請され命令されたものではなく、私自身の興味と関心に基づくものであつた。殊に日常生活における神ないしは仏に対する信仰生活の実態をさぐることであり、学術的な小論をと企図したものであつた。未開の蕃地へ潜入することであるから幾らかの危険は覚悟をしていたが、そのような心配は全く杞憂に過ぎなかつた。私の性にあつた仕事であり、労苦はむしろ楽しみでもあつた。

丁度昭和十四年も暮の十二月、思いがけず東本願寺

より、さきの東本願寺花蓮港布教所開設の功績により、五等旌賞が授与されるといふ光栄に浴した。旌賞はいわば宗門における金鶏勳章で、無やみに誰彼に授与されるものではないといふことを知っていただけに感慨もひとしおのものであつた。早速ご仏前に供えて深く礼拝し、仏恩を感謝した。合掌、念仏。

台湾より蒙疆へ

蒙古聯合自治政府（主席徳王）成立

内蒙古のシリングール盟の世襲親王であつた徳王は内蒙の独立をさげんで久しく中国の国民政府と争つていた。日本はこの蒙古民族の民族感情を利用して自治政府を建設させ、内蒙古を日本の勢力下に置いた。昭和十二年十月二十八日成立宣言がだされ主席に雲王、副主席に徳王が就任した。

次いで日華事変（昭和十二年七月の蘆溝橋事件から昭和二十年八月の日本の無条件降伏まで）中、日本と結び、昭和十四年日本の樹立した察南政庁（首都張家口）、晋北政庁（首都宣化）と共に蒙古聯合自治政府（後に蒙古自治邦政府と改称）を樹立し、雲王の死後を継

いで徳王が主席に就任した。

忠民兄はこの時は既にその頃二機（東条英機、星野直樹）三スケ（岸信介、松岡洋右、鮎川義祐）と称せられていた内の一人星野直樹とともに満州国へ渡り、満州国創建（昭和七年）間もない頃の熱河省承德税捐局、や牡丹江税捐局の局長を歴任し、今度はまた満州国派遣官吏として張家口税務署で原署長のもとで総務部長として活躍していた。大同厚和の両税務署も兄が機関接收して開設したものであった。

その後、内地の小学校教頭であった三兄の里治兄も渡蒙して、張家口にあった最高学府察南師範学校の副校長として現地の俊秀を集めて教員養成の大切な任務に就いていた。

時はあたかも戦局は日増しに激烈を極めつつあり、第一乙種合格であった私は二回にわたって教育召集を受け厳しい毎日が続いていた。

管内に訓練中にも私の前後から幾人もの人達に召集令状（赤紙と称していた）がきて戦地に立っていった。私は今日か明日か。いずれ近い内に戦地に立たねばな

らぬと固く決心をしていた時、張家口の四兄忠民兄から一通の手紙が届いた。建国間もない蒙疆（察哈尔省・綏遠省の両省と山西省北部をあわせた総称）の地で兄弟三人が力を合わせて大東亜共栄国建設のために働いてみないかという表明であった。

私は迷った。私にとって台湾における最も大きな心労苦であり、ピンチであった。華蓮港布教所は認可は降りたが開設されたばかりであり、花蓮港在住のご門徒衆が開設を喜んで、私を信頼し、敬愛して下さいておられる。それを振り切って捨てて去ることは、情においても忍び難いことである。危険や困難を覚悟で始めた蕃地における蕃人の習俗実態調査にも未練が残る。あれを思いこれを思い、心労の余り眠れぬ幾夜が続いた。ご門徒の総代の方々にも了解をもとめた。ご本山へも至急後任をと依頼し内諾も得た。内地の故郷へも詳しく報告した。

兄弟三人薬土建設に挺身することになる

年があらたまつた昭和十五年一月、私は夏服のまま薄暮の中、厳寒の張家口駅の駅頭に降りた。駅に

は三兄の里治兄が迎えに来て下さっていた。不安な長途の疲れも兄を見た瞬間霧消して肩を抱き合うようにして四兄忠氏兄の待つ官舎へと急いだ。清河橋を渡つて約二十分余りで洋館の立派な官舎に着くと、忠氏兄夫婦は「よく来た」、「よく来た」といつて迎えて下さった。用意されていた心づくしの温かいものを食べながら、夜のふけるのも忘れて語り合った。私の就職は既に内定しており、暫く休養してから役所に連れていくとのことであった。兄なればこそと心の中で手をあわせ拝むような思いであった。

いよいよ兄弟三人、異国異郷の地で力を合わせ、心を合わせての生活が始まるのだ。

後編

張家口脱出記

ソ連参戦前の状況

市内に避難壕の掘削音がどろく

昭和二十年七月に入ってから張家口市内には日本軍の往来が目立つようになり、なんとなく慌ただしい雰囲気予感され、言葉には言い表せないような不安な

胸騒ぎに襲われる毎日が続いた。巷間の話しによるとこれらの皇軍は主として中支・北支方面軍で連日軍用の貨物列車に武器や弾薬、兵糧を満載して、万里の長城を越えて張家口に到着した。これらの物資は張家口郊外の東太平山、西太平山の山麓の広場に山積みされ、後になって幾つもの軍用テントに格納された。

この東太平山から連日絶え間なく大きな発破の轟音が市内にまで重苦しく響いた。張家口在留邦人二万五、六千人の生命、財産を守り、食糧その他を保管貯蔵するための避難壕（横穴式）の掘削音であった。戦況わかに覚悟は決めていても、連日絶え間なく大きな音を聞いていると、胸にこたえ、いい気持ちはしなかった。口の悪い邦人の中には「在留邦人玉碎の墓穴さ」と冗談ともつかず語る人もあったが、あるいはという不安な予感に襲われることもないではなかった。しかし私の周囲には誰一人として引き揚げる人としてなく、また引き揚げを話題とすることすらなかったのは今にして思えば不思議というほかはなかった。

無言のうち心と物の整理の日が続く

張家口は当時人口十三万余、蒙古自治邦政府の首都であり、漢人商業資本の蒙古進出の前進基地であり、また北支の小京都とも言われていた。昭和十三年以来ずっと内蒙の第一線警備隊として駐屯している駐蒙軍司令部をはじめとして、政治、経済、学術、文化の中心であった。したがって政府関係のあらゆる機関はもとより、その他日本人、満州国人、漢人（中国人）、蒙古人、回教ウイグル人の学校、各会社の本社、銀行、病院、郵便局、などが多く、在留邦人の多くはこれらの職業に従事し、八紘一宇、日・満・漢・蒙・回の五族協和の理念に基づいて皇道楽土建設に邁進していたのであるが、先にも述べたように、いつ邦人の引き揚げとなるかもしれないという不安な予感のせいか、誰が言うともなく、各家庭では不用な物は現地人の売買屋に売り払ったり隣近所の現地人に分け与えたりして、それとなく身辺の整理に怠りなかった。

私の家庭では素直に正直に勤勉に働いてくれていた水くみの夫役（下男）、掃除と洗濯の阿媽（下女）に

感謝とお礼の意味も含めて、私達の衣服のすべてを分け与えた。しかし内地から持ち運んだ哲学、倫理学の原書類、日、独、英、漢の辞典類、それに張家口銀座と言われていた怡安街にただ一軒あった邦人の桜井書店に注文して、わざわざ内地から取り寄せてもらった多数の哲学書などの新刊の蔵書はいかんともしがたく、万一の場合は涙をのまずばなるまいと観念し、いつもつらい思いをしながら書架に並んだ書籍を眺めて暮した。このようにして誰かれとなく立場の違いこそあれ、おもむろに心の準備と物の整理が邦人家庭で行するうちに七月も終わり八月八日の大詔奉戴日を迎えた。

昭和二十年五月六日、市内福安街付十一号の市公署の官舎で生まれた坊や（文麈）は、今日は出生九十五日である。前年の一月十五日、教員養成の学校（現金沢大学教育学部）を卒業したばかりで私と結婚し、内地での教職を退職して直ちに渡蒙、なれない異郷の地で、再び張家口第一国民学校教諭に復職し、苦楽を共にしている若い妻は、連日にわたる緊張と不安で豊

富であった母乳の量も最近はめっきり少なくなつてしまつた。紅葉のような可愛い手で、乳房にすがる愛児と新妻を眺めながら、非常緊急の脱出時には命に代えても二人を死守せねばと、心中秘かに決意をする毎日であつた。

ソ連参戦後の状況

八月八日ソ連の対日参戦の報伝わる

八月八日、ソ連の対日参戦のニュースは張家口の邦人にも直ちに伝わつた。それと同時にソ連軍が満州国境を越えて進撃中とか、ソ連軍戦車、装甲車六十数両、内蒙の張北の北方二十数キロ付近にまで進撃中という情報などが乱れ飛んだ。しかし張家口城内の邦人は嵐の前の静寂というべきか、さしたる周章狼狽の風も見えず極めて冷静、平穩のようであつたが、現地人による略奪暴動がいつ起こるかもわからないという不安は隠しきれなかつた。それにしてもソ連の参戦は誰しも予期せぬ寝耳に水の出来事であつた。

昭和十六年四月、日本とソ連との間に締結された日ソ中立条約は国際法に基づく名実共に日ソ不可侵条約

であつた。ソ連の参戦はこれを一方的に踏みにじつた暴挙であり、あまつさえ日本軍の拡大しきつた南方の戦線においては六月二日、沖繩が米軍によつて占領され、敗色日に日に濃く、また統後の国内においては「撃ちてしまふん勝つまでは」と呼号はしていても、敗色歴然たる日本の弱点を突いてのしかも後からの急襲であつた。

私は残念ながらソ連のこの参戦によつて日本の敗戦は決定的なものになつたと観念し、終戦も近いと判断した。この日、夜になつて私は民留民国の隣保班々長として、中国の人達の間を散在している班内の人たちによつても緊急に脱出できるような心と物の準備を怠りなきやうにと伝達に飛び廻つた。

張家口市内外の治安にさしたる変化なし。

蒙古自治邦政府の施政の方針は八紘一宇、五族協和の理念に基づいており、現地住民の農地を取り上げて日本から送りこんだ開拓農民に分ち与えるというような満州建国の際にとつた方策をとらなかつたために、現地人の反感をかうというようなことはなかつた。又

張家口周辺の農村に送り込まれた若い行政指導の參事官（副知事）は蒙疆学院で厳しく施政の根幹である友愛親和の精神をたたきこまれた優秀な連中（私は学院二期生）であったので、現地住民と一体となって楽土建設に挺身していたために、ソ連の參戦でむしろ邦人に同情の念を示すくらいであった。事実、私はこれまでに張家口近辺の各県（陽原県、蔚県、來源県、懷來県、琢鹿県）の教育行政を視察にでかけてみても、肌で現地住民のわれらに対する親近感、信頼感、期待感を得ることができた。そのために治安の状況は張家口の内外を問わず極めて平穩で良好そのものであったが、一般在留邦人は矢張り抜きがたいある種の不安に眠れぬ日々をいかんともすることができなかつた。

ソ連の參戦に関しては駐蒙軍は昭和二十年の早い頃からこれを察知しており、およそ九月か十月頃と見ていたようである。そのために張家口の近県はもとより、奥地に派遣されている政府官吏並びに警察官の家族などは、できるだけ張家口、大同、厚和などに集結して待機するよう勸奨して、満州国の二の舞とならないよ

う措置されていたので、引き揚げ時の張家口の人口は在留邦人二万五、六千人、それに近辺各県、並びに奥地から行政官、警察官の家族など総計約四万四、五千人に膨れあがっていた。いざ緊急引き揚げとなった場合、これら邦人は果たして無事に引き揚げる事ができるであろうか。

八日のソ連參戦と同時に在留邦人の成年男子は一人残らず、地区防衛隊に緊急に召集された。私にも非常召集の令状がきた。私は百日足らずの乳飲み子を若い妻に託し、親しい隣人夫妻に後事を頼んで、後ろ髪を引かれるような思いをこらえて、あわただしく応召した。夕闇の迫る中で、乳飲み子をあやしながら、ただ声もなくむせび泣く妻の見送る姿を後にして指定の集合地張家口駅前へ急いだ。これが今生の別れか。最愛の者との離別はかくもつらいものか。振り返った時には既に二人の姿は暗闇の中に消えて見えなくなっていた。

その夜、私は張家口駅から蒙古自治邦政府の施政下最西北端包頭への車中であつた。着なれぬ軍服に身をかためて列車に揺られながら、來し方、行く末を思い、

遠くわが日本の故郷の山河を思い、亡き嚴父、年老いた慈母を、兄や姉を、そしてたつた今残してきた妻子を思い、一睡もできずに防衛の第一線に進発したのであった。

妻子よ、さらば、前途の平安を祈る。

(八月八日夜、応召したため、八月二十日夕闇の中に帰還)、

張家口駅の引揚列車の妻子に再会するまでの状況は妻の日記の記述にもとづいて記す)

張北の兄上様、無事緊急脱出

八月八日夕方、応召した主人を見送って部屋に帰ったが、飯台の上には夕餉の用意をしたままで、主人は箸もつけずに急いで行ってしまった。私はとても箸をとる気にもなれず坊やを抱いて涙にくれた。独りで余りの悲しさ淋しさに耐えられず隣家の富樫友吉様ご夫妻を訪ねていろいろとお話をした。富樫様ご夫妻は「今夜はここにお泊りなさい。淋しかったら毎晩でもきて泊りなさい。」と優しく言って下さった。主人のいない官舎には怖くて、とても独りで眠れないと思い、

毎晩夜は泊らせてもらうようにお願いして、少しは安心することができた。富樫様のご主人は張家口女子中学校の副校長であった。

夜の八時頃であったであろうか。大東亜省派遣日本語教員として張北の師範学校の副校長の要職にあった主人の兄上里治様が張北前方二十数キロに迫ったソ連軍の戦車、装甲車の襲撃を逃れて張北を脱出し、着のみ着のまま私たちの官舎に避難してこられた。ソ連の参戦以来、張北が危ない、邦人が心配だという在留邦人の話を聞いて、日夜心配していた主人がいたらどんなに喜んだであろうに、数時間前に応召してしまって、今はいない。けれども私は主人の兄上様の無事な避難を喜ぶとともに、心細かった不安も一度に吹き飛んで、お兄上様がいて下さればもう安心と、どんなに嬉しかったことでしょう。夕餉の飯台をそのままにして応召した主人の冷たくなったご飯に、熱いお茶を差上げて、ご飯を召しあげていただいた。張北からは軍用のトラックで皇軍の兵士に守られて帰還なさったとのことであった。早速桶風呂を沸かしてお疲れ

をとっていただき、それから張北の前線の緊迫したお話しをうかがって身の縮むような思いをした。

韓国の一部の人たちはいつの間に用意してあったのか、ソ連参戦と同時に腕に「大韓民国」と書いた黄色の腕章をつけておられたが、邦人は外出するにもそのような腕章はなく、買い物には今までの安心感はどこへやら、四方八方への警戒のため身の細る思いをせねばならなかった。張家口第一国民学校の同僚の先生方はどこにどうしておられるだろうか、安否を知りたいのだが訪ねることもできない。お兄上様はようやく元気をとり戻されたようである、顔色もよくなってきたようだ。

日本本土においては八月六日に広島に新型爆弾が投下された。この年に初めてアメリカにおいて実験に成功したばかりの新型爆弾であった。八日には仁科芳雄博士らはこれを原子爆弾と確認した。さらに九日には長崎にも原爆が投下されたと聞いた。

涙とともに詔勅放送を聞く

八月十五日は内地では旧の盂蘭盆会の日である。内

地におれば切籠燈籠^{キリことうろう}とお花を持って祖先の霊を慰め冥福を祈る墓参りに行っているであらうけれども、こちらには墓もない。しかし主人の書架の上に安置した霊位には朝夕、主人に代わって礼拝を欠かしたことはなく、今日も心を新たにしてお礼をした。今日は正午に恐れ多くも天皇陛下の終戦詔勅放送があるというので昼食もそこそこに済ませて、お兄様やお隣のご夫妻と一緒にラジオの前に正座して放送を待った。正午、雑音で聞き取りにくい部分もあったが、まぎれもなく特徴のある独特な陛下のお声であった。日本は米・英・華・ソ四か国の対日共同宣言、いわゆるポツダム宣言を受諾し無条件降伏した。日華事変、太平洋戦争は終結したという終戦の詔勅放送であった。

六月二日には米軍の沖縄本島上陸占領、八月六日には広島に、九日には長崎に、さらにソ連対日参戦と、日本はまさに致命的、決定的ともいうべき局面に立たされていたのである。私たちは既に覚悟はできていたとはいえ、悲痛とも聞こえる終戦詔勅の放送を聞いて、恐れ多くも陛下のみ心を拝察し、これから先の自分と

子供のことを思い、わけもなく、知らず知らずのうちに涙がとめどもなく頬を濡らすのであった。主人はいまどこでこの放送を聞いておられるのであろうか。戦争は終わった。主人はきつと生きて帰ってこられるであらうという明るい希望も湧いてくるのであった。

張家口脱出、夫役よ、阿媽よ、再見

坊やの生まれた官舎よ、さようなら

八月二十日午後六時すぎ、隣組から次のような伝達があった。「今夜の治安の情勢は極めて不穏で危険なので、今夜一晩分の非常食を持って直ちに張家口第一国民学校の校庭に集結して下さい。」というものであった。ちよūdお兄上様と晩ご飯の食卓に向かおうとしていた時だった。お櫃にとった温かいご飯を全部おにぎりにして、普段から用意の非常持出袋に詰めて、お兄上様に持っていたとき、私はおむつ袋を首から頭陀袋のように前に下げ、坊やをしつかり背中に背負い、もんぺにズック靴をはき内外の戸締りを確認して、最後に住み馴れたわが官舎に向かつて、「ありがとうございました」と両手を合わせて静かに一札をして

から、在職中通いなれた張家口第一国民学校に向かつて歩いた。途中、近くに住んでいる夫役と阿媽にお別れとお礼のあいさつに立ち寄り、官舎の中のもの二人で自由に処分してもいいと申した。二人は私たちの後にいつまでもついてきてくれて帰ろうとしなかったので、私は振り返り「再見」「再見」「謝謝」と言つて手を振ると、二人は目頭を押さえて立ちどまり、いつまでもいつまでも手を振つて別れを惜しんでくれた。人間と人間の親愛の情は国境を越え、人種を超え、民族を超えて私たちをこのように結びつけていたのか、と私はあふれる涙をこらえきれず、二人と永別をした。

今夜一晩の避難という伝達ではあるが、私は恐らくこれが最後の避難脱出であろうと思った。恐らく伝達の奥には軍と官との深謀遠慮が隠されているのであるうと思つた。主人がずっと以前から常々言っていたことを思いだしたのだ。緊急に脱出する時には身軽でなければならぬ。品物に未練を残してはならぬ。物より生命が大切だと。今晚一晩の非常食持参という伝達は、

私に主人の言葉をまざまざと思い出させた。私は官舎にも、二人の現地の夫婦にも別れを告げたのはそのためであった。

夕闇の迫る中をお兄上様と国民学校へ急ぐ途中、誰かが「国民学校へ集まるのではありません。張家口駅へ集まるのですッ。」と叫んでいる。第一国民学校に集まっていたであろうと思われる大勢の人たちが一斉に張家口駅に向かって歩いていてはいないか。街の両側の中国人商店のあかりもすべて消えていて、夕闇の薄明りを頼りに誰しも言葉もなく歩いた。駅の近くになると、駅前の広場は既に引き揚げの邦人であふれ、駅のすべてのプラットホームも人の山であった。そして恐らくは引き揚げの人たちが持ちだしたであろうと思われる荷物の山が、ホームのあちこちに小山のように積み上げられていた。引き揚げ列車の出発した後、直ちにすべて焼き捨てられたであろう。この緊急非常の時に人命が大切か財産（品物）が大切か。一人でも多くの人が乗車するためには品物を載せる余裕などあるはずがない。駅には四十五両編成とかの無蓋の石

炭運搬用貨物列車が引込線に何列車も何列車も用意されていて、先に到着した人たちは既にわれ先にと乗車していた。子供を見失った若い母親らしい人の叫び声、わけのわからない怒号や叫喚、悲しそうにうずくまっていた婦人、病院から連れだされ、あるいは運びだされたか弱い病人、必死に看病する肉親の心配そうな顔々、産前産後で入院中だった気の毒な婦人方など、とても冷静に傍観し得ないようなこの世の哀れさに胸の塞がるような切ない衝動に駆られるのだった。――以上は妻の日記より――

応召中夢にまでみた妻子と無事再会

私は終戦によって、召集されていた地区防衛の任務を解除され、内蒙自治区の果ての包頭バオトウから張家口に帰還したのが二十日の夕方。直ちに妻子の待つであろう官舎に駆けつけると、兄上様と妻子は既に張家口駅に集結してしまつた後であった。幸いに官舎と駅との距離が近かつたために駅に引き返して、無蓋の引き揚げ列車に乗ってしまったのであろう妻子を探して必死に走り廻つた。夕闇の迫る中を血眼ちまなで探し回つてい

る私を見つけた友人が「心配しなくてもよい。確かに
お兄さんと一緒にこの列車に乗られるのを見た。大丈
夫だ、心配いらぬよ。」と大声で言ってくださっても、
この目で無事を確かめ、兄や妻子にも私の無事を一刻
も早く知らせてやりたい一念で、友人の言ってくれた
この列車を隅から隅まで探して回るうち、やっと無蓋
車の片隅に兄上様と、坊やを抱いて力なくうずくまっ
ている妻を見つけた時の嬉しさは、どう表現したらよ
いであろう。ただただ妻の肩をたたき手を握り、坊や
の頭を撫でて顔をさすり、言葉もなく胸の奥から熱い
ものがこみ上げてくるばかりであった。憔悴した妻も
目に涙を一杯ためて「お帰りなさい。」と一言。私は
かたわらの兄上様の無事を心から喜び、妻子を無事に
守っていただくことに対して「ありがとう」と
何度も繰り返し返した。ここにわれら四人はただいまから
力を合わせて全員無事に内地に帰還することを楽しみ
に、まだ前途にいかなる苦難が待っているやうとも耐え
忍んでいこうと心に誓った。

わずか十日余り見ぬ間に妻子は心労のためかすつか

りやせ衰えてしまい、豊富であった母乳の量もすつか
り細くなつて、乳飲み盛りの坊やには不十分で、手足
のくびれもなくなつてしまつていた。なんとかして妻
に温かいご飯を食べさせて、母乳の出るやうにせねば
と思つたがいかにともしがたく、でない母乳を、求め
てむずかる愛児をあやす妻を無念に眺めるほかになす
すべのないせつなさに、私はそつと涙を隠さねばなら
なかつた。

天与の小休止一時間、妻子助かる

第一列車、第二列車、第三列車と四十五両編成の無
蓋の石炭運搬用の貨物車両がよくこれだけ多く集めら
れたものである。このかげには恐らく邦人鉄道、職員
たちの不眠不休のご苦労があつたものと想像される。
昼間の運行は八路軍の襲撃の目標になるといふ危険が
あつたために、主として運行は夜おこなわれたのであ
る。

そして時に手榴弾の埋設や橋梁の破壊、鉄道通信線
の切断等があるために、点検の車両が必ず先行して危
険の有無を点検しての、のろのろ運転であつたから、

普通の運行ではない。駅々にはまだ皇軍の兵隊さんが駐屯して警備にあたっておられ、引き揚げ列車が通過する時には乾麺ぼうと称する軍用の固い食べ物が入った麻袋をホームから貨車の中へほうり込んで下さった。これが引き揚げ者の空腹を満たしてくれる唯一貴重な食料であった。二、三センチぐらいの小さい硬い麵製品のようなものであった。貨車の中でこれを皆で公平に分けあって食べるのであったが、両手のひらを広げて一杯ももらえれば、それが一食であった。

乳幼児が天津に到着するまでに幾人死んだことであろうか。雨が降れば雨に濡れ、太陽が照れば炎熱に焼かれ、風が吹けば風に吹きさらされ、トンネルを通れば油煙を吸って息苦しく、顔はすすけ、顔も洗わず食事もとれず、大人でさえこの苦行である。ましてや乳幼児にとつてこれ以上の苦難がどこにある。妻の日記には「坊やを病気にさせてはならない。お乳が細くなる。……。陽が照ればおおつて陰にし、雨が降ればおおつて雨を防ぎ、……」と書いている。

着のみのままの脱出であったため着替えの衣類な

どあるはずはなく、着ている衣服は汗に濡れて乾き、雨に濡れてまた乾く。坊やのおむつは大小問わず洗わないまま天日に乾かして使用する。同車の人達は内心はいざ知らず、誰一人として嫌な、にがい顔をする人としてなく、それどころか私たちに代わっておむつを太陽にかざして乾かしてくださるといふ善意に、幾度となく、嬉しさを、かたじけなさに心ひそかに泣かされたのであった。

張家口を脱出して三日目かであったと思う。線路脇の小川のほとりで約一時間余り列車がとまった。この間を利用して隣の人の軍隊用の飯盒をお借りして、非常用袋の中に用意してあった白米を入れ、小川の水でサットとき、枯れ草や小枝をかき集めて、大急ぎで炊飯した。

早速湯気の上がる温かいご飯を妻に与えたが、同車両の隣人達は「よかったねえ」、「よかったねえ、これで坊やちゃんもお乳がもらえるよ。」と言つて慰め励ましてくださるのであった。私は思い続けていた一念がかなったことを喜びながら、これできっと、母子共

生気を取り戻すことができるであろうと思ひ、心から神、仏に感謝した。飯盒のご飯はすべて妻に与えた。翌日になると確かに効果があらわれた。少しは母乳の出もよくなり、可愛い手で、母親の乳房をまさぐつていた坊やも、時には笑顔を見せるまでに元気になった。母乳のおかげである。今にして思えば三日目の小休止は、線路脇に小川のあつたことも幸いして、最愛の妻子にとつて、天が私たちに与えてくださった賜物であつたように思えてならない。前後に幾人も乳幼児の死のあつたことを思うと、生命をお与え下さつたようにすら思うのである。合掌念仏。

ありがとう、駐蒙軍の皆さん

ありがとう、鉄道員の皆さん

張家口からの邦人引き揚げには、一般の邦人には知られない多くの陰の力のあつたことを決して忘れることはできない。

その一つは、邦人の引き揚げを援護するために張北前方の最前線陣地を死守して下さつた駐蒙地区警備軍（軍司令官根本中將）の死闘のあつたことである。

先にも書いたように戦車、装甲車六十数台を連ねて国境を越え、平原を怒濤のように進撃してきたソ連軍や八路軍（抗日戦争期に、華北で活躍した中国共産党軍、昭和十二年国共合作成立以後国民革命軍第八路軍と改称した。）を迎撃、これの進撃を阻止するという張家口防衛の決死的な戦闘行動があつたればこそ、邦人はソ連参戦後二十日の引き揚げまで諸般の準備を余裕をもつて進めることができ、無傷で北京天津にそれぞれ引き揚げることができたのであつた。もし、皇軍の前線死守の死闘がなかつたならば、と思うと皇軍に対する感謝の言葉すらみつからないほどである。

他方、沿線各駅に対しては油断のならない八路軍の襲撃に備えて、不眠不休の沿線警備に當つて引き揚げ列車の通行の安全を保障して下さつたことも挙げられる。

この二つは、華北交通、鉄道交通関係員の寢食を忘れた献身があつたことである。私たちが駅に到着した時には既に引き揚げ列車が何本も準備されていた。これだけの車両を集めるためにどれほどの苦勞があつた

ことであろうか。想像するに余りありと言うべきであろう。

しかも四万数千人の邦人を手際よく乗車させ、発進させることは、この混乱の中、大変なことであったのである。さらにまた、無蓋車にいつぱいになった四十五両編成の引き揚げ列車が傾斜の急な八達嶺を越え、万里の長城を越えていくためには一台の機関車では力不足で不可能であった。そのために二重連の機関車で索引しなければならなかった。次から次へとこの難所に到着する引き揚げ列車を一刻を争って長城を越えさせねば、いつ八路軍の襲撃があるかわからないという切迫した作業が昼夜を分かたず敢行されねばならなかった。後日聞いた話であるが、八路軍のたび重なる妨害によってズタズタに切断された鉄道通信線を復旧するのは難作業であったという。このような必死の、いや決死の献身があったればこそである。

全く頭の下がる思いである。私たちがここを通過した時、沿線警備の皇軍と鉄道関係の人たちが両手を高くあげて、「元気で行けよ」「無事に帰れよ」と言っ

見送ってくださった晴れやかな、満足そうな笑顔を忘れることはできない。妻の日記には、このことを「ありがたくて、嬉しくて、涙が胸をつく。」と書いている。「ありがとう、皇軍の皆さん。」「ありがとう、鉄道関係の皆さん。」合掌礼拝。

八月二十五日午後、天津駅着

普通ならば七時間余りで着くところを八月二十五日午後私たちの引き揚げ列車は雨の中、無事に天津駅に到着した。先に出発した列車は北京に到着し、邦人は市内の各収容所に運ばれていたようだ。私たちは天津駅に到着すると直ちにトラックに分乗して、一部は日本租界内の淡路国民学校その他の学校や施設に、他の一部は郊外の大和国民学校やその他の施設に運ばれた。張家口在留邦人引き揚げのために小学校の机などが在留邦人たちによって、すべて片付けられてあった。各教室を組単位とし、組を四班に編成し、班長が互選されて班員を掌握した。班長の上に組長がいて、各階毎に組長の中から選ばれた各階の代表を決めた。私

は本部の総務を担当し、他にとりあえず配給、医療と

救護、渉外の四部を設置した。各部の部長のもとに組長、班長を配置して、一致協力、統制ある協同精神で運用することにした。

とりあえず第一の仕事は、名簿を作つて、各引き揚げ収容所に配布し、家族の安否を確かめると同時に、今後の配給その他共同生活の基本の台帳とすることにした。収容所内の人たちは狭い無蓋貨物車両の中で膝や肩をもたれ合わせ、お互いに生活を共にし、励まし慰め合つてきた仲だったので誰も彼も車中や到着の疲れも忘れて素直に積極的に、意見や伝達事項を聞いて協力してくださつた。

私が以上のような仕事に追われて、淡路国民学校にきている間に、兄上様と妻子は後続の到着の列車の人たちと郊外の大和国民学校に運ばれてしまつていた。そのうちに天津民留民団の人たちのお世話で温かい高粱のお粥をいただき、疲れきつた心身にやっと生気が蘇つてきて、はじめて心の底から安堵感が湧いてきた。明朝郊外の大和国民学校に兄上様と妻子を迎えに行くことにして、軍配給の軍用毛布をひつかぶつて床の上

に横になった。応召以来ずっと肌身離さず大切に持つていた銀側の懐中時計は午前三時を回つていた。うとうととするうちに、あちこちに人声が聞こえ、目がさめた。

突然の難題に泣かされる

今日は八月二十六日快晴。朝食をすませ、トラックに乗つて妻子を迎えに大和国民学校に出かけた。兄上様はじめみんな元気で待つていてくれた。淡路国民学校では二階六班六十五号室に家族一同集結完了。ゆつくりと心身を休め、あとは引き揚げ船の出発を待つだけとなつた。一週間もした九月の初め頃であつたらうか、アメリカ兵が四、五人やつてきて、学校を接收し、米進駐軍の宿舎に充てるので立ち退け、というのである。きつい命令であり、全く交渉の余地はなかつた。せつかく落ち着いて、少しは心の余裕もできた時だつただけに、遭遇したこの難題に途方に暮れ、無念の涙をのまざるを得なかつた。私たちはとりあえず、公会堂、貨物廠、休止中の織物工場などに散り散りに散つていかなければならなかつた。暗闇の中を走る私たちのト

ラックめがけて煉瓦のかげらや大粒の石が幾つも幾つも飛んできて、頭や肩、背中にあたった。家内と二人で坊やを必死に守った。私たちは寝るところと食べる物さえあれば、死ぬことはあるまい、と最後の腹をくくり、まだこの先どのような難題が降って湧いてくることか、内地に無事に帰り着くまで「頑張ろう」と話し合った。その後私たち四人は友人の世話で、貨物廠から租界内の公会堂に移ることができた。

公会堂には、ほこりをかぶった撞球台が物置にあつた。その上に坊やを寝かすことにして、私たちは物置の撞球台の下に寝た。それでも油のしみこんだ異様な臭気に眠れぬ夜の続いていた貨物廠と較べれば、ほこりくささを除けば雲泥の相違であつた。私はここでも本部に呼び出され、英語の読み書きができるというので、涉外と総務の仕事を任せられ、主として天津在留邦人の差入れの衣服や、軍支給の雑貨物の割り当てや、分配に忙殺され、食事時以外は兄上様や妻子の所へこられない毎日だったが、時には三々五々連れだつて公会堂周辺の散策にでかけ、大道に並べられた品々を見

て歩いて無聊を慰めた。

ある日坊やを抱いて、皆で散歩に出かけて帰つてくるとお金のはいつた財布がないのに気づいた。財布や金は少しも惜しいと思わなかつたが、守り神のようにしていつも財布の中に持ち歩いていた亡き父上様の写真も一緒になくなつたことは返すがえすも残念であつた。私の不注意のために亡き父上様に申しわけないことをしたという思いは、内地に帰つてもいつまでも忘れることができなかった。

第一次引き揚げ乗船者名簿作成に入る。

十月になると、天津に引き揚げ後も心身脆弱な老人や病人、殊に乳幼児は相次いで死んでいった。引き揚げ者には立派な医師もおり、正規の看護婦も助産婦もいた。医薬品も市中で買うことができて、完全とは言わないまでも一生懸命な治療や看護がなされたが、しばしは皆で悲しい思いをせねばならなかつた。そのために第一次の引き揚げ船は老人、乳幼児、病人を有する家族を最優先にする、ということに決め、乗船名簿作成にはいった。しかし第一次乗船に該当する家族の

中には第一次乗船を辞退し、第二、第三次乗船にしてほしいという家族が続出した。それは主として次の理由によるものであった。恐らく事実には反する噂話か憶測であったであろうけれども、「いまだに渤海湾はもとより、黄海、朝鮮海峡付近に浮遊機雷がたくさんあって航海の安全が保障されない。」というものであった。さらにまた、「今日まで、我慢、辛抱して生きながらえてきたこの命を機雷に引っかけたて撃沈されることはない。航海の安全が完全に保障されるまで乗船を待つ。」というものであった。しかし乗船名簿を作成して、先の条件で人選をしたからには「安全航海」の無いはずがない。安全航海の保障があつてのことと判断したので、乳幼児を持つ私たち家族は最初から第一次乗船名簿に登載されたが、辞退する気はさらさらなく、終始一日も早く乗船し内地へ帰還のできることをこいねがっていた。

第一次引き揚げ乗船者天津公会堂出発

十月二十一日午後いよいよ引き揚げ第一乗船者が天津公会堂を出発する日がきた。内地帰還のための出

発である。一同公会堂を出て芙蓉国民学校に集結した。ここでは主に支給された荷物の検査で夜通しかかり、夜明けの寒さから坊やを二重、三重にくるんで守る。十月二十二日午前十一時、妻はリュックを背負い、坊やを胸に抱いて、天津駅に集結し、間もなく汽車は塘沽港に向かって出発した。港に着くとまたもや米軍と中国側との検閲があり、その都度わずかばかりの荷物をひっくり返さねばならなかった。この度重なる検査や検閲にはほとんどうんざりしたが内地へ帰れるのだと思うと、我慢をせねばならなかった。検閲が終ると順次乗船を開始した。船は江の島丸という貨物船である。

船底から甲板まで養蚕の時の棚のように幾層にも棚が造られて、その上にアンペラが敷いてあった。この棚へ頭からすべりこんで横になって寝るのが精一杯で、少し背の高い人は座っただけで頭がつかえるほどであった。一人でも乗船させるためにはこれより外にいたし方はなかったであろう。

すべての人が乗船を完了するまでには随分と時間が

かかった。私たちは幸いにも船底近くの棚ではなく、甲板の下の棚であったため、「船底の棚でなくてよかったね。」と兄上様と三人で語り合った。

引き揚げ船はすべて貨物船の内部を改造せねばならなかったのです、ここでも多くの人たちの善意と、ご苦労のあったことを忘れてはならない。

夕闇の迫る頃甲板上をみると、三々五々引き揚げ者が集まってきて、いよいよ内地に帰られるという喜びで、久しぶりに顔をほころばせて談笑の輪ができた。

潮風が心地よく頬をなでる。出帆は恐らく明朝であろう。妻子の待つ棚へもぐりこむと、坊やは妻に抱かれてすやすやと眠っていた。私は兄上様と來し方行く末を語りながらいつしか眠りに落ちた。

引き揚げ第一船江の島丸

塘沽港の岸壁をはなれる

十月二十三日狭い窮屈な蚕棚のアンペラの床だったが、目が覚めた時には気のせいか体も頭もすつきりしている。お昼過ぎ進駐軍の米兵が十数人乗船してきた。私はこの米兵が私たちと一緒に内地へ行くのであれ

ば、引き揚げ船は絶対に安全に内地に帰還できるであろう、と確信した。この米兵達は引き揚げ船江の島丸の安全輸送航行の責任者たちであろうと思つたからである。果してそうであったかどうか、いまだに知るよしもないが、当時米兵十数人も江の島丸に乗船しているということだけで、すっかり安心してしまった。私のこの思いは他の人達も同様であった。

午後一時過ぎ銅羅の音とともに、長い汽笛の声を残して江の島丸は静かに港を離れた。甲板上では鈴なりになつて、苦楽を共にした懐かしの中国大陸に別れを告げた。感無量とは、まさにこのことか。思わず流れる涙。大陸よ、さらば。江の島丸の船行は慎重そのものであった。常に水先案内船が先航した。「明けても、暮れても青い海。一日も早く夢にまで見た懐かしの故郷の山河が見たい。」と妻が日記に書いている。

故郷の山河見ゆ

甲板上に歓喜の万歳

十月二十六日、待ち焦がれた青一色の故郷の山河が見えてきた。甲板上には期せずして万歳の歓声が上が

り、明日はいよいよ博多港だと喜びを分かち合った。二十七日午後江の島丸はゆっくり博多港に入港した。下船は各県別に明二十八日午前と決定した。私は石川県下船引率の責任者として最後のご奉公をせねばならなかった。引き揚げ船の中に寝るのも今夜が最後である。高粱のお粥を食べるのも今夜が最後である。坊やを死なせずに帰ることができたことを神仏に感謝し、よく心身の労苦に耐えて、坊やを守り通した妻に改めて感謝の「ありがとう」を述べて、最後の夜を過すために、蚕棚のアンペラの上に心身を横たえたが、ますます眼が冴えて眠れぬ一夜を明かした。

懐かしの内地の土を踏み

涙の老母に抱かれる

十月二十八日昼食後、予定通り各県別に下船し、岸壁に集まって人員を確認した後、用意されてあった臨時の引き揚げ貨車に乗って、夕方近く博多港を出発し、二十九日夕方大阪駅着、三十日午前大阪駅発にて、米原經由午後三時小松駅に着いた。駅には慈母を囲んで肉親、親戚多数が出迎えて下さった。薄汚れた乞食同

然の異様な姿に驚かれたようであった。老母に近づくと、「よう帰った、待っていた。」と肩を抱いて、ハラハラと涙をこぼされ、私は「ただいま」というのがやっとであった。

わが育った懐かしの家に帰ると、亡き父上様の霊前に報告、神・仏の加護あればこそ生きて帰れたことを喜んだ。妻子も元氣だ。暫く休養し、「いざ妻子のために頑張るぞ」という気概が湧きあがってきた。

執筆者の横顔

昭和十二年得度して仏門に入り僧侶となる。大学卒業後南洋、台湾にて開教に従事したのち、内蒙古の張家口に渡り、教育行政官として活躍中終戦を迎え内地に引き揚げた。引き揚げ後は県内の公立高校教諭三十九年、定年退職後は金沢の大学で哲学やドイツ語の教授など、四十数年の教職を退いた後、要請されて町内会長、老人会長をする傍ら、加南地方史研究会、自然保護協会、小松市高齢者交通安全協議会、石川県老人交通安全推進員等々の会員、役員、会長として、それぞれの分野においてはなくてはならぬ貴重な存在とし

て、現在尚なほ鑠たくとして活躍しておられることは衆目の一致するところである。特に今日重要性が叫ばれている老人クラブ活動の推進と啓蒙、発展のための献身に對し、表彰状、感謝状の授与とされしこと二、三にとどまらず。

氏はまた書道と文筆に長じ、書道展出品や、公的懸賞論文の寄稿にはいつも入賞入選（何れも最優秀賞）の榮譽を受けた。今年四月には多年にわたって蓄積された論稿のごく一部を、三六〇余頁の著作にまとめて出版したところ、県内外に活躍しているかつての教え子が發起人となり、「中山隆先生、傘寿と出版を祝う会」を催した。百五十余人の政・官・財の名士達が参集され、会は渾然一体、感激のるつばに終つたが、これなどまことに氏の人柄の一端を示すにふさわしいものであつた。

南洋、台湾、蒙古と常に外地の第一線にあつて、開教使、教誨師、教育行政官としての労苦を少しも誇張することなく、かえつて淡々と記述し、労苦の中にも一縷の光明を求めて爽やかに生きてこられた姿勢

に敬意を表すると共に、苦難の中で家族を愛し、両親を忘れず、神や仏にたいする、限りなき畏敬と信頼は、そのまま多くの人たちの敬愛を受けられる所以でもある。座談会、講演会等に走り廻る氏の生きざまはまさに老人の典型といつても過言ではない。

（石川県引揚者厚生同盟

会長 久木 孝作）